有田誠（ありたまこと） 京丹波町在住の映画愛好家。

写真は、満州帝国章（長春にて筆者撮影）。

小澤征爾さんが亡くなった。その三日後には、三十年近く音楽監督を務めたボストン交響楽団が、バッハの「G線上のアリア」を追悼演奏した。中国でも、多くの音楽活動に関わり、小学校の教科書にも載ったことがある。

小澤征爾（以下敬称略）は、一九三五年、奉天（現瀋陽）に生れた。征爾の名前は、一九三一年、満州事変を起こした関東軍の高級参謀板垣征四郎と作戦参謀石原莞爾から付けられた。

その父、小澤開作は一八九八年、山梨の生まれ。母さくらは一九〇八年、仙台の生まれである。

小澤開作（一八九八～一九七〇）

東京歯科医学専門学校を卒業した開作は、一九二〇年、満州に渡る。大連で勤務医ののち、長春で開業する。

同志山口重次らとともに一九二八年、満州青年連盟を結成する。目標は満州の独立、「五族協和」の「王道楽土」を建設することだった。「五族」とは、満州人、日本人、漢人、朝鮮人、モンゴル人を指す。

石原莞爾と意気投合した開作は、歯科医院はうっちゃって、政治活動の日々を送る。一九三一年九月、満州事変勃発。青年連盟は関東軍の行動を支持する。翌十月には、関東軍司令官本庄繁（丹波篠山人）に「満蒙自由国建設綱領」を提出、「朗らかに踏み込め、高らかに飛び込め」と、関東軍ともどもイケイケの状態がつかの間つづいた。

その後、石原は孤立し、関東軍から外される。一九三二年に成立した満州国は、二年後に愛新覚羅溥儀を皇帝とする大日本帝国の傀儡国家、満州帝国となる。日本から乗り込んできたのが、岸信介や大平正芳であった。

失望した山口重次は、牡丹江に去る。小澤開作は一家ともども一九三六年、北京に移った。新京時代には、懸賞金がかけられ、狙撃されたこともあったらしい。

北京では、編集人兼発行人として『華北評論』を出していた。「この戦争は負ける。民衆を敵に回して勝てるはずがない」と主張し、軍部ににらまれる。思想憲兵が毎日来ていた。しかし、その小山憲兵一家と親しくなり、食事をともにし、子供に剣道を教えてくれたとのこと。拳句の果て、その憲兵は小澤家のお手伝いさんと結婚、開作とさくらが仲人をやっている。

一九四三年に引揚げて、立川に住んでいたとき、立川署の特高課長が監視に来ていた。平気で政府や軍の批判をしてもつかまらなかった。一九七〇年に死亡したとき、その高木元特高課長から、さくらに手紙が来た。「当時、ご主人のお話を伺いながら、この方こそ真の愛国者なのだと、ひそかに確信しておりました」と書かれていた。

後列左から長男克己、父開作、次男俊夫
前列左から三男征爾、母さくら、四男幹雄

敗戦間近には和平工作にも関わっていたらしい。蒋介石が石原莞爾を特使として要求してきたが、東条英機が邪魔に入ったらしい。

死の四年前、訪米してロバート・ケネディ司法長官と面会。満州の失敗を前提とし、米国のベトナム政策を批判する建言文書を渡している。

「おれは死ぬ時はあっという間に死ぬからな」。一九七〇年十一月二日、心筋梗塞で死亡、式では山口重次が別れの言葉を述べた。

小澤さくら

仙台にいた頃は詩を書いていた。石川善助という人に詩をみてもらう。彼は西条八十や野口雨情と付き合いがあり、〝酒は涙かため息か〟の作者である。

馬車の荷はキャベツの山や
　　瀋陽の街
屋台店焼餅（シャオピン）の匂いライラック

火鍋（ホーコーズ）子みがいて我家冬支度
　　小澤さくら

一九二七年、写真だけで長春に渡り、開作と結婚する。大連で満鉄に務めていた叔父の紹介だった。

結婚しても歯科医は最初だけ、政治活動でほとんど家におらず、その家も多くの人間が出入りしていた。

そんな中で、四人の男の子を生み育てていている。

長男克己（一九二八年長春生）は、小澤征爾による と、兄弟で最も才能のある。わが家に芸術を持ち込んだ兄貴だったとのこと。映画が好きで、ジェームズ・ディーンの『エデンの東』を十回以上観ていた。一九八四年、京都で五十六歳で早逝。

瀋陽駅（筆者撮影）

次男俊夫（一九三〇年長春生）は小澤昔ばなし研究所所長として、現在に至るまで多くの好著を出版している。三男が征爾。四男が幹雄（一九三七年大連生）、俳優、放送タレント、エッセイストとして活躍中である。NHK大河ドラマ『勝海舟』では、ジョン万次郎を演じた。

さくらは、新京にエノケン一座が来たとき、親しくなり、家に泊めた。三十年後、幹雄は東宝芸術座でエノケンの舞台に立つことになる。作品は菊田一夫の『がめつい奴』だった。

奉天で叔父が鞍山（アンシャン）の中学教師で赴任の際、その娘を預かる。その同級生に李香蘭の妹がいた。

大連星ケ浦のホテルでは隣室に川島芳子がいた。清朝王族粛慎王第十四王女、大陸浪人川島浪速（なにわ）の養女として育てられ、満州帝国崩壊後、漢奸として銃殺刑になった。『人妻椿』や『愛染かつら』を戦前に大ヒットさせた野村浩将（ひろまさ）監督が『戦雲アジアの女王』（一九五七）として彼女を映画化、芳子を高倉みゆきが演じ、高島忠夫、丹波哲郎らが出演した。

北京で同仁病院に入院したとき、隣室に汪兆銘国民政府主席が入院中だった。

戦後、黒柳徹子の弟紀明が征爾と同じ桐朋学園、さくらと母の朝さんはPTAでいっしょだった。

市ケ谷で開作の告別の会をやったとき、隣の自衛隊で三島由紀夫が割腹した。

何とも、さくらさんも二十世紀の歴史や人物とあちこちで遭遇してきたのである。二〇二〇年没。